

外国人学生の日本語習得と母語からの言語的距離：

『HANDS10年史』国際学部外国人学生体験レポートを起点に

佐々木 一 隆

はじめに

本稿は、2020年8月に刊行された『宇都宮大学HANDS 10年史—外国人児童生徒教育支援の実践—』（田巻 2020）第10章に掲載された「国際学部外国人学生体験レポート」を起点に論じる研究ノートである。一般に外国人学生が日本語を習得する際の達成要因として重要なものには、大別して学習環境（家庭・学校・地域）と母語からの言語的な距離があると考えられる。本稿では、これらの二大要因を概観した上で、外国人日本語学習者の母語が言語的に日本語からどの程度の距離にあるかという要因に焦点を当て、言語学の視点から論じる。なお、言語は文化を内包するという視点に立てば、「言語的」は「言語文化的」に置き換えることもできる。

学生体験レポートに登場した修了生・卒業生・在籍生は17名で、敬称略で氏名（母語）を紹介すると以下ようになる。小波津ホセ（スペイン語）、王希璇（中国語）、金信穆（韓国語）、アギーレナルミ（スペイン語）、鈴木アリサ（韓国語/日本語）、谷口ジェニフェ（ポルトガル語）、熊谷美陽（中国語）、土田美幸（タガログ語/日本語）、アティラナシル（トルコ語）、五十嵐ダリア（ロシア語）、木村マリアナリサ（ポルトガル語）、久富アリネリサ（ポルトガル語/日本語）、王書鴻（中国語）石雯漢（中国語）、張丹尼（中国語）、陳弘宇（中国語）、楊添植（中国語）である。国籍ではペルー、中国、韓国、ブラジル、日本、アメリカ、トルコ、ロシアにわたり、母語としてはスペイン語、中国語、韓国語、ポルトガル語、

日本語、ロシア語に及び、中には母語と日本語の均衡バイリンガルの域に達している者もいる。

先述のとおり、日本に在住する外国人児童生徒や学生が日本語を習得する際の達成要因として重要なものには、学習環境と母語からの言語的距離がある。そして、THAN THI (2018) が論じているように学習環境の主な要素としては家庭、学校、地域が挙げられ、母語からの言語的距離を示す要素としては、Campbell (1995)、柴田(1993)、角田(1991)、松本(2006)、Shopen (2007)、佐々木(2018, 2019, 2021)、Sasaki (2021)、伊坂(2016)、衣畑(2019)、Azalia (2021)、TON NU (forthcoming) を参考にして、文字、音声・音韻、語彙、語や文の構造、言語が内包する文化などが挙げられる。日本語習得の目標を話しことばのみならず書きことばにも据えるなら、文字も重要な学習対象となる。具体的には、伊坂(2016: 247) が述べているように、表音的文字である平仮名・片仮名と表意的文字である漢字が併用され、部分的ではあるが、ローマ字も使われるという複雑な文字体系を学習する必要がある。

以上の認識に立ち、本研究の目的は、『HANDS10年史—外国人児童生徒教育支援の実践—』X (=第10章) の「国際学部外国人学生体験レポート」を起点に、外国人学生が報告した日本語学習の内容と方法を参照しながら、主に母語からの言語的距離の要因に焦点をあてて論じることにある。

本稿の節構成は以下のとおりである。「はじめに」で本研究の概要と目的を述べた上で、

I節では学習環境と母語からの言語的距離という日本語習得の二大要因について手短かに概観する。II節では、母語からの言語的距離と日本語習得をめぐり、文字、音声と音韻、語彙、語や文の構造、文化に焦点をあてて論じることにする。

I. 日本語習得：学習環境と母語からの言語的距離

17人の体験レポートから、外国人学生の母語は、スペイン語、中国語、韓国語、ポルトガル語、タガログ語、トルコ語、ロシア語の7言語であることを確認した。

このI節では、こうした母語を出発点にして、17名の大半が基本的には来日により（数名は日本で生まれであるが）日本語への習得に至った学習環境は実に多様である。まず、来日のきっかけには多様な面が見られ、親の出稼ぎであったり、外国籍をもち外国にルーツがあるものの日本で生まれ育ったり、アメリカで生まれ、幼少時に韓国に渡り、その後来日したりするケースがあった。また、東日本大震災をきっかけに日本の医療技術に惹かれて来日したり、日本生まれではあるが、母親の母語を学ぶため一時期フィリピンに暮らした後に日本に戻ったり、母親の大学院進学や親の結婚を機にあるいは家の都合で来日したりする事例もあった。

日本語習得の達成を促す学習環境の要因についても17者17様の特徴が観察される。学習環境の主要要素は、家庭・学校・地域となるが、家庭で使用される言語や親の子供へのかかわり方が異なり、日本の学校に就学した時期や学校（小学校、中学校、高等学校など）も多様であり、公立か私立か、全日制か定時制か、日本人学校か外国人学校かなどの違いも見られる。地域についても都会か地方かなどの違いもある。他方、母語からの言語的距離という視点から日本語との相違を眺めてみよう。その一典型例

として、Campbell（1995）に基づき主語S、動詞V、目的語Oから構成される基本語順について、日本語を各学生や卒業生の母語と比較すると以下ようになる。

- (0) 日本語：Typically SOV.
- (1) スペイン語：Both SVO and VSO are regular.
- (2) 中国語：Essentially SVO. SOV is not at all uncommon.
- (3) 韓国語：SOV is normal.
- (4) ポルトガル語：SVO is normal.
- (5) タガログ語：There is a broad division into predicate-initial and non-predicate-initial languages.
- (6) トルコ語：SOV is basic; the inverted sentence is possible, with certain reservations.
- (7) ロシア語：Free; SVO, SOV are common+ O(S)V occurs.

日本語の基本語順は典型的にSOVであり、比較的単純と考えられる。これに対して、他の言語の基本語順を観察すると、それほど単純ではないことが多い。すなわち、スペイン語はSVOとVSOともに規則にかなっており、中国語は本質的にはSVOであるが、SOVがまれであるとは決して言えない。一方、韓国語はSOV、ポルトガル語はSVOが単純に通常であると言える。さらに、タガログ語の語順は述部で始まるものと述部以外で始まるものに大別され、トルコ語はSOVが基本語順であり、条件付きで倒置文が可能である。最後に、ロシア語は語順が自由であり、SVOとSOVがふつうで、主語が省略される可能性を含んだO(S)Vの語順もある。こうした比較から、各母語における日本語との言語的距離はまちまちで、複雑であり、日本語習得へのプロセスも実に多様である。

II. 母語からの言語的距離と日本語習得：文字、音声と音韻、語や文の構造、文化に焦点をあてて

17人の体験レポートに照らして、II節でもCampbell（1995）に基づき、柴田（1993）なども加味して文字、音声と音韻、語や文の構造の比較を行い、スペイン語をはじめとする7言語と日本語との文脈依存度の差を含む文化面の特徴も比較する。なお、I節で論じた各言語と日本語間に見られる基本語順の違いは除くこととし、それ以外の特徴を列挙すると以下のようになる。

(8) 日本語

- ・文字：漢字、平仮名、片仮名、ローマ字の4体系
- ・音声と音韻：子音15、母音5；高低アクセント
- ・語や文の構造：複数形は主に代名詞、関係節は名詞の前に置かれる、後置詞
- ・文脈依存度：高い

(9) スペイン語

- ・文字：ラテン文字
- ・音声と音韻：子音20、母音10；強弱アクセント
- ・語や文の構造：性・数・格の変化；関係節は後置される
- ・文脈依存度：要確認

(10) 中国語

- ・文字：漢字
- ・音声と音韻：子音22、母音8；声調4
- ・語や文の構造：屈折なし；関係節は前置
- ・文脈依存度：要確認

(11) 韓国語

- ・文字：ハングルと漢字
- ・音声と音韻：子音22、母音8
- ・語や文の構造：関係節は前置、後置詞
- ・文脈依存度：要確認

(12) ポルトガル語

- ・文字：ラテン文字
- ・音声と音韻：子音22、母音9

- ・語や文の構造：性・数・格の変化；関係節は後置
- ・文脈依存度：要確認

(13) タガログ語

- ・文字：ローマ字
- ・音声と音韻：母音5、子音15；強弱アクセント
- ・語や文の構造：関係節は後置、後置詞
- ・文脈依存度：要確認

(14) トルコ語

- ・文字：ローマ字
- ・音声と音韻：子音20、母音8；強弱アクセント
- ・語や文の構造：関係節は後置、後置詞
- ・文脈依存度：要確認

(15) ロシア語

- ・文字：キリル文字
- ・音声と音韻：子音20、母音10；強弱アクセント
- ・語や文の構造：性・数・格の変化；関係節は後置、後置詞
- ・文脈依存度：要確認

日本語との比較において、各言語には相当の多様性が確認できる。文脈依存度の確認を含めて、詳細は別の機会としたい。

III. おわりに

本研究ノートでは、田巻（2020）の第10章「国際学部外国人学生体験レポート」を起点に論じたもので、「はじめに」で本研究の概要と目的を述べた上で、I節では学習環境と母語からの言語的距離という日本語習得の二大要因について手短かに概観し、II節では、母語からの言語的距離と日本語習得をめぐる、文字、音声と音韻、語や文の構造、文化に焦点をあてて論じてきた。

今後の展開として、今回の学生体験レポートに基づいて、日本語習得の達成要因としての言語的要因をさらに深く考察する予定である。以下の4名からすでに内諾を得ているので、インタビュー調査を行いたい。

- 陳弘宇氏（中国語から日本語へ）
 - 鈴木アリサ氏（韓国語から日本語へ）
 - 小波津ホセ氏（スペイン語から日本語へ）
 - 五十嵐ダリア氏（ロシア語から日本語へ）
- これらの調査結果を受けての考察は、別の機会に譲ることにする。

引用文献

- AZALIA BINTI ZAHARUDDIN (2021) The Effects of Own Language Use on Ethnic Malay Learners of the Japanese Language: Towards the Localization of Japanese Language Education in Malaysia (マレー系日本語学習者に対する媒介語使用の影響：マレーシア日本語教育の現地化に向けて) 宇都宮大学大学院国際学研究科博士論文。
- Campbell, George L. (1995) *Concise Compendium of the World's Languages*. Routledge.
- 伊坂淳一 (2016) 『新 ここからはじまる日本語学』 ひつじ書房。
- 衣畑智英 (編) (2019) 『基礎日本語学』 ひつじ書房。
- 松本克己 (2006) 『世界言語への視座：歴史言語学と言語類型論』 三省堂書店。
- 佐々木一隆 (2018) 「多文化共生における言語の重要性」 『多文化共生をどう捉えるか』 下野新書12、下野新聞社、31-35頁。
- 佐々木一隆 (2019) 「比較の視点でみる日本語：アジアの諸言語や英語との相違点と共通点」 『宇都宮大学国際学部研究論集』 第48号、31-38頁。
- 佐々木一隆 (2021) 「文脈依存度と日英語主語の比較：英語から自然な日本語への翻訳に焦点をあてて」 『宇都宮大学国際学部研究論集』 第51号、35-42頁。
- Sasaki, Kazutaka (2021) "Some Notes on Nominalization in Japanese: A Typological Perspective." *Journal of the School of International Studies, Utsunomiya University* 52, pp. 39-44.
- 柴田武 (編) (1993) 『世界のことば小事典』 大修館書店。
- Shopen, Timothy, ed. (2007) *Language Typology and Syntactic Description: Clause Structure (Volume I), Complex Constructions (Volume II), and Grammatical Categories and the Lexicon (Volume III)*. Second Edition. Oxford University Press.
- 田巻松雄 (2020) 『宇都宮大学HANDS10年史—外国人児童生徒教育支援の実践—』 日本学術振興会2020年度科学研究費補助金基盤研究(A)「外国人生徒の学びの場に関する研究—特別定員枠校と定時制通信制課程の全国調査」(課題番号19H00604、研究代表者田巻松雄)
- 角田太作 (1991) 『世界の言語と日本語』 くろしお出版。
- THAN THI MY BINH (タン ティ ミ ビン) (2018) 「日本在住ベトナム人の子どもに対するベトナム語教育の可能性—家庭を中心としたバイリンガル教育の観点から—」 宇都宮大学大学院国際学研究科博士論文。
- TON NU THANH TU (トンヌー タントウ) (forthcoming) 「ベトナム人日本語学習者にとっての文章の多義的曖昧さに起因して発生する読解上の問題」

付記

本研究は、日本学術振興会科学研究費基盤研究(A)「外国人生徒の学びの場に関する研究—特別定員枠校と定時制・通信制高校の全国調査」(研究代表者：田巻松雄、課題番号19H00604)の研究成果の一部である。